

内科、外科には救命救急の当直が、各1名配置されるのですが、緊急患者の病態により、必要な科の研修医がまず呼び出されました。その状況を見て当直の指導医を呼び出すかどうか研修医が判断します。ちなみに呼び出される回数の第1位は小児科でした。小児科医は人数も少なく本当に大変だったと思います。そして、栄えある第2位が整形外科でした。内心、栄えなくなかったのですが・・・。

それだけ忙しい研修医の給料は如何ほどか？と思われませんか。国から研修医に対する補助金が支給されているのですが、調べた結果当時、28万円ほどでした。しかし、実際に小生が受け取った額はなんと月に5万円でした。2年目は6万円でした。余談ですが、そこから研修医棟使用料、1万円が引かれていました。前回の投稿にて「あゝ野麦峠」と小生が記した所以です。ちなみに国から支給された残りはどこへ消えてしまったのでしょうか・・・？！

当然家族は養えませんし、自分の食費すらまなりません。良くしたもので、研修医1年目の夕食は2年目の研修医が連れて行ってくれました。2週に1回程度は教授が夕食に連れて行ってくれていました。当然、大学近くの豊明市内中華や居酒屋がほとんどでしたが、結構おいしい店が多く、今だにもう1度行ってみたいな～！と思える店もいくつかあります。その中の一つが、豊明市役所の近くにある「とんかつヒロ」です。本来小生はコースのとんかつが好きだったのですが、「とんかつヒロ」のヒレカツは最高でした。ヒロさん、ありがとう！

研修医1年目は実家のはちや整形で休日に当直や、時間の空いた時に手術の手伝いをし、その涙ばかりの給料でなんとか暮らしていました。整形外科では2年目からアルバイトが許され、週1回の1日と、夜の当直バイトは許されていたので、何とか自立することが出来ました。それでも家族を養うにはギリギリでした。もちろん先輩方を見習い、研修医1年生の食費の面倒もみていましたよ！

研修医2年目の小生のアルバイト先は何と浜名湖の近くにある佐鳴湖の畔の中西整形外科でした。週1回のバイトでしたが、浜松までは車で通勤していました。当然車通勤でしたので、浜松西インターまで行き、そこからローカル道を通り、中西整形外科までは1時間ほどでした。19床の整形外科専門の医療機関でしたが、手術も行っていました。午前中外来をこなし午後から手術で、夕診を終了してから名古屋まで帰ってきていました。夕診受付は18時半まででしたので、帰宅は当然20時半頃でした。給料は名古屋市内のバイトより割高に設定されていましたが、車で通勤していたので、割高分の給料でも労力に見合いません。そこで院長と事務長に対して、ガソリン代と高速代を上乘せってもらうように交渉して、それに見合う給料が設定されましたので、小生は一生懸命働かせていただきました。ただビックリしたのは、手の腱鞘炎の通称「ばね指」の手術を外来で行うことと、腰椎椎間板ヘルニアの手術を局所麻酔で行っていたことです。手術の展開まではいいのですが、骨を一部削って出した神経根をよけてヘルニアを摘出するのですが、神経根をよけ

る際相当痛いらしく、患者さんが「ギャ〜！！」と叫ぶのです。そうすると院長の指示で“ケタミン（麻薬剤）”を静脈注射し、患者さんはぐったりするといった状況でした。腰椎椎間板ヘルニアの手術は全身麻酔でしか行ったことがなかったので、衝撃の体験でした。良い勉強をさせていただいたと思っております。

3年目も中西整形外科でのバイトを指示されましたが、その途中で中西院長ががんに侵されていることが判明し、週に2回バイトに行くように言われました。中西院長は当時の保大の主任教授の矢部先生の慶応大学の先輩で、当時上下関係は大変厳しかったので、その要望に応えたようです。小生たち医局員は言わば教授の駒でしたから・・・

残念ながら、その年の後半中西院長はご逝去されましたが、お嬢さまが保大の整形外科医局員で、当時保大医局に在籍していた村上君と結婚し、現在も中西院長の遺志を継いで病院を護っておられます。

研修医2年目を過ぎると通常の緊急外傷の手術は任せていただいております。指導医に見守っていただき、何かあると指示され、場合によっては“手洗い”を行って助けていただきました。本当に面倒見の良い先輩たちでした。

そのような過酷な研修医時代2年を経て、いよいよ出張に赴きます。保大整形外科は設立も浅く適切な出張病院にも限りがありましたので、系列の慶応大学の関連病院にお世話になっていました。小生は清水市立清水総合病院の整形外科に出張を命じられ、家族で清水に出張しました。新幹線路線近くのアパートを借り、当時2歳だった長女の紅を連れ家族3人で病院の近くに住んでいました。富士山の良く見える絶好の場所でした。

清水市（当時）には救急車や緊急を受ける病院は3病院しかなく、毎晩のように呼び出しがあり、紅も夜中にベビーベッドの上に立ち上がってほぼ毎晩のように泣いていたので、ゆっくり寝られる環境にはなく、結構疲れていましたが、まだ若かったので何とか乗り切れていました。

（2024年4月3日）